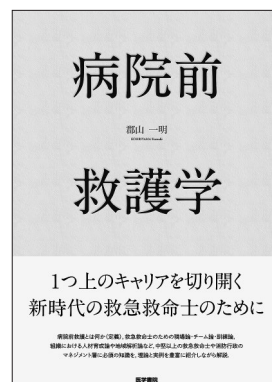


病院前救護学



評者

南 浩一郎 一般財団法人救急振興財団救急救命東京研修所教授

「病院前救護学」というと今まではそれを簡潔明瞭に説明できる書はなかったように感じる。そもそも、救急救命士制度は1991(平成3)年4月23日に救急救命士法が制定されて制度化された。成立してわずか20年しか経過していない新しい制度である。『病院前救護学』の著者である郡山一明先生は、その創生期から救急救命士教育の中心となり活躍されてきた。病院前救護学とは何かを問うには、著者をおいて他にはいないのではないかと私は思っていた。

この本の大きな特徴は、著者が救急医療、救急救命士養成、救急医療行政という3つの最前線に立っていた経験に基づき、病院前救護とは何かを三次元的視点から簡潔明瞭に述べている点である。医療関係者からの視点のみの場合、ややもすると「病院前救護学」を疾患別に対応する救護マニュアルにしてしまいがちになる。また、そのような著書は救急医向けには多く書かれている。また、救急救命士養成者の視点からでは、何を教えればよいのかという教育論になりがちである。また、行政に携わってきた人によると、行政からみた救命士制度論になってしまう。本書は、「病院前救護とはどういうものか?」という問いに、病院前救護の定義、現場論、チーム論、訓練

論、人材育成論、地域解析論、将来的な救命士像という視点から解析し、体系化している。

さらに、この『病院前救護学』の特徴になるのは、随所に使用された図や表である。郡山先生の講義を受講したことがある方は納得できると思うが、著者の講義はとにかくわかりやすい。講義中のスライドに使用される図は、抽象化した概念を頭の中できちんと具体化させてくれる。また、この図が珠玉であり、本書を読み返すときには図を追いかけるのみで内容が蘇ってくる。これは、著者の類まれな才能を反映したものであり、他書にない魅力ではないかと思われる。

私自身、救命士教育に携わって10年以上経過した。業務をこなす日常に追われて、「病院前救護学」とは何かを体系化する努力などまったくしてこなかったと感じる。また、現場で日々活躍されている救急救命士や救急医においても同じではないかと推察される。知識、経験は豊富であるが、整理がついていないという方には、本書の一読を強く薦める。また、これから救急救命士をめざす方、救急医をめざす医師、救急行政に携わる方には必読の書ではないだろうか。

郡山 一明 著

B5判/178頁/2020年/定価3,960円(本体3,600円+税10%) / ISBN978-4-260-04275-8 / 医学書院刊